

氏 名 簡 中昊

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 1811 号

学位授与の日付 平成28年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 近代日本の台湾原住民認識
—作家たちが見た「野蛮人」—

論文審査委員 主 査 教授 牛村 圭
教授 劉 建輝
教授 坪井 秀人
教授 下村 作次郎 天理大学
教授 大東 和重 関西学院大学

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本論文は日本統治期の台湾文学を中心に、植民地台湾の関連史料と作家個人の台湾経験を通して、日本人作家による台湾原住民表象を論じるものである。(なお本稿における台湾原住民とは、中国から移住してきた漢民族ではなく、台湾島とその周辺島嶼に古くから定住していた複数のオーストロネシア語族を意味するものとする)。従来の研究は霧社事件、帝国日本の「南方」・植民地台湾の表象、日本統治期の台湾文学、作家研究などさまざまな角度から台湾原住民に論及しているが、台湾原住民表象を中心とする通時的な研究はまだ存在していない。本論文は作家の置かれた歴史背景や個人の台湾経験などを念頭に置きながら、作品の分析を通して、作家たちによる「台湾原住民像」の異同・変遷を考察する。その際、日本統治期の台湾原住民関連作品の目録・研究資料を参照し、作家の台湾滞在経験の有無・同一主題の持続性とその作品の使用言語・発表地・主題・作品数などの条件を設け、8人の作家とその作品を研究対象とする。また、近代日本の台湾原住民認識の歴史背景や現地での武力反抗事件といった史実を確認したうえで、各テキストの分析をおこない、作家たちが見た台湾原住民像を析出することを旨とする。

第一章では、西洋における「文明と野蛮」の系譜をふまえて、近代日本における「土人」概念と統治を概観し、そのなかの台湾原住民の特徴を考察する。近代日本は支配領域の拡張過程において、自国の周辺部と植民地・統治地域に「野蛮」の「土人」を、自国の「文明」の対照物として次々と発見した。近代日本の植民地支配の論理は、一般的に「文明の和人」(＝本土の日本人)と「野蛮の土人」(＝植民地・統治地域の住民)という二項対立的図式で進められたが、植民地台湾の場合はこれと異なり、「内地人」(＝本土の日本人)―「台湾土人」(＝漢民族)―「蕃人」(＝原住民)という三重的構造を取っていた。そのため、帝国日本の周辺と支配領域内の「土人」を比較すると、台湾原住民が「土人」概念の最下位に位置づけられていることがわかる。明治政府は台湾山地の資源を獲得するため、「五箇年理蕃計画事業」を実行し、またその事業によって引き起こされた近代日本と台湾原住民の間の戦争により、「人殺し」や「人食い」など原住民に対する「凶悪的な野蛮人」の印象がより強められた。

第二章では、中島竹窟、宇野浩二、中村古峽、佐藤春夫を中心に、日本統治初期から霧社事件までの台湾原住民の文学表象を考察する。1910年代中期、治安の安定化と日台間の交通制度・機関の成立によって、民間人が台湾へ旅行できるようになり、紀行文的な作品も現われた。4人の作品における原住民表象は一見無関係のようであるが、実際は通底する一種の連続性を持つ。中島竹窟と中村古峽の作品はそれぞれ「官」と「民」の角度から、近代日本の「野蛮人」に対する認識と位置づけを確認した。宇野浩二は議論をさらに一歩進め、「文明」と「野蛮」の二項対立関係の本質を提示し、それに対する独自の思考を始めた。佐藤春夫は台湾山地の統治現場を観察し、その原住民を表象することによって、近代日本の文明と植民地支配の現実を批判した。佐藤の作品には一種の限界があるが、一つの転換点としての意味を持っている。以上の4人に共通してうかがえるのは、一定の距離を保ちつつ原住民を観察し、その内面(＝「野蛮」の本質)には深入りしないところである。「旅人」の目で見られた「蕃人像」は近代日本文明の「先進性」／「問題点」を照らし出した一方、それはあくまで遥かな「外地」に存在する「他者」の形象にすぎなかった。そ

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

のため、原住民の「野蛮性」についても、表面的な描写に止まり、精神面において論じられることはなかった。なお、本章では特に中島竹窩の作品への分析を通して、台湾原住民関連作品における 1910 年代までの研究上の「空白期」の補填を企図する。

第三章では大鹿卓、中村地平、真杉静枝、坂口禰子を中心に、霧社事件から戦後にかけての台湾原住民の文学表象を検討する。1930 年の霧社事件は日本統治期における台湾原住民の最大の武力反抗事件であり、その波紋は政界から民間にまで広がった。事件は従来の「文明」と「野蛮」の二項対立を本格的に浮上させたが、その矛盾を解決することは、事件以降の台湾原住民関連作品の潜在的な課題となり、4 人の作家もそれぞれの立場でこの課題に挑戦した。大鹿は原住民の「野性」描写にかなり重きを置いたが、その「野蛮人像」はやや単調に終わった。彼は作品を通して原住民の「本来の姿」を肯定し、「理蕃」政策の根底における非人間性を批判した。そこに底流するのは、「弱者への同情」という大鹿の文学を貫く一つの志向性だった。中村は自身の台湾体験と南方憧憬をもとに、多彩な原住民像を描出し、近代日本と原住民の関係における事件に注目したが、戦時下という背景もあり、「野蛮人」をあくまで「文明」によって「克服」されるべき対象としか描くことができなかった。真杉静枝は国策文学の風潮に合わせ、原住民女性に独自の観察を示し、従来の「日本人男性一原住民女性」という二項対立的図式を脱構築化した。坂口禰子は台湾山地での疎開生活体験をもとに、戦後、「謝罪」の意識で多数の霧社事件関連作品を創作した。彼女の作品には、霧社事件を山地の人間関係の葛藤に矮小化する一面があるが、事件中の人物像を活写することによって、原住民を「野蛮人」ではなく、愛情や義理を持つ「普通」の人間に「還元」させた。霧社事件から終戦までの 15 年間、台湾原住民関連の作品数が急増し、それに伴う「野蛮人」への思考や論述も大きく変化した。作家たちが描く「野蛮人像」は、近代日本の「文明」と対照させるための「他者」表象であり、「文明と野蛮の葛藤」を解釈・解決するための「道具」でもあった。

日本統治期から戦後にかけて、作家たちが描く「野蛮人像」には、①人類学的視点、②「文明と野蛮」という系譜における近代日本と台湾原住民の自他関係、③作家自身の植民地体験・文学志向、という三つの要素が確認できる。①では、「馘首」が常に「野蛮性」の象徴として注目された。②は常に歴史事象と植民地支配の現状と問題に対する描写を通して行われたが、特に「親子関係」と「男女関係」の比喻で解釈される傾向が強い。なかでも「蕃婦像」は大変重要な役割を果たした。①と②は全作品に共通するテーマであるが、③によって異なる方式で表現された。

総じて、台湾原住民関連作品においては、全期を通じて種々のテキスト相互の間で「連続性」が見られる一方、霧社事件を契機として前半期と後半期に「差異性」をも読み取ることができると主張してよい。

すなわち、「文明と野蛮」という二項対立をめぐる思考は一貫した主題として、一種の「連続性」を示しているが、霧社事件以前と以降の作品の間には大きな「差異性」も存在している。「前期」の作品は植民地台湾の旅行記の一種として、従来の台湾原住民への「野蛮人」認識を継承し、それぞれ距離を保ちながら、原住民を様々な角度から観察するものであったのに対し、「後期」の作品は二項対立と「野蛮」の本質という問題に集中的に着目し、戦時下という時局や国策の制約を受けながらも、それぞれ異なる方式でその解釈ないしは解決を求めた。

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

しかし、作家たちの認識上の限界、現地台湾原住民がおかれたマイノリティー状況などの時代の制約により、戦後に至っても二項対立の「本当の解決」がまだできていないのが現状である。そのため、「文明と野蛮」の課題は未解決のまま、ほかの数多くの植民地時代の遺留問題と共に、今日まで続くポストコロニアル的状況の一部となっている。だが、近代日本人作家たちが、「文明と野蛮」の課題を直視し、それぞれの「野蛮人像」を創出し、そしてその努力が近代日本における「文明と野蛮」をめぐる思考を大いに促したことは、彼らの文学者としての最大の特徴と貢献と言えよう。

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

博士論文の審査結果の要旨
Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、近代日本の台湾原住民認識について、台湾領有当初に創出された「文明と野蛮」という二項対立的な言説が、1930年に発生した霧社事件を境にいかにか修正されながらも継承されていったか、また、その後その言説が多くの文学者の参入によって、いかに多様化し重層化していったか、という歴史の変遷を考察する試みである。本テーマに関しては、すでに数多くの論考が存在するものの、いずれも個別の作者しか取り上げておらず、作家論ないしは作品論の域を出ていない。対する本論文は、考察の時期を霧社事件までの前期とそれ以降の後期に分け、それぞれの期に代表的な作家を4人ずつ選び、各作家の作品について詳細なテキスト分析を施すにとどまらず、各作家間の、さらには霧社事件を境目とする前後の、表象上、認識上の、継承と断絶を明晰に提示し、はじめて構造的、通史的にその全容を明らかにした。

論文は、問題を提起し主要な先行研究を紹介する序章、近代日本における「土人」概念の成立と、国内「土人」(アイヌ人、琉球人)への支配の過程を整理する第一章、旅人の目線から台湾原住民を観察し、表象した作家たちを論述する第二章、霧社事件以降に現れた現地の滞在経験をもつ作家たちによる多様な「野蛮人」像を考察する第三章、そして全体の総括と今後の研究課題を提示する終章、から構成されている。

序章では、かねて「蕃族」と呼ばれた台湾原住民が歴史的にいかなる存在であったかを紹介した後、日本統治期の台湾原住民をめぐる文学表象に関する研究史を整理する。また、原住民を表象した多くの日本人作家から霧社事件を挟んで4人ずつを取りあげた理由を詳述し、本論文の構成を概説する。

第一章では、西洋で広くみられた「文明と野蛮」という二項対立的構造が日本で受容される中、アイヌ人や琉球人を包摂する「土人」概念が立ち上げられ、そしてその両者を支配する過程において「勸農」や「帰俗」、また融和を目的とする「旧慣調査」等の施政が行われた歴史的経緯を追跡する。その上で、こういう政策が台湾領有後、ことごとくいわゆる「理蕃」(原住民統治)事業に活かされた事実を確認し、近代日本におけるアイヌ、琉球、台湾原住民への認識、施策上の連続性を指摘する。

第二章では、台湾領有初期の日本人役人などの駐在者、ツーリズムの成立に伴って台湾を訪れた「旅人」、として中島竹窩、宇野浩二、中村古峽、佐藤春夫の4人を取り上げ、それぞれの原住民表象を考察する。現地警察官という駐在者であった中島竹窩が、雑誌『太陽』に連載した「生蕃探検記」と、関連する地理学や人類学の調査報告を分析し、作中に示された「非人間化された」原住民像は、中島本人の認識というよりもむしろ既存の帝國的諸言説の上に成立し、同時代の「文脈」を体現したにすぎないと指摘する。宇野浩二については、台湾原住民を最初に扱った作品「揺籃の唄の思ひ出」の分析を通じて、日本人の父と誘拐後「生蕃化」された娘との葛藤を描く叙述に「文明と野蛮」の対立を認め、この「命題」をめぐる文学的実践の濫觴だと結論付ける。中村古峽については、台湾旅行体験から生まれた「鷲鑿鼻まで」と「蕃地から」の両作品を取り上げる。「馘首」の慣習を持つ「蕃人」を恐れる一方、日本語を話す「蕃童」に心が揺れるという主人公の心理を考察した上で、作者が従来「文明と野蛮」の対立構造を継承しながらも、原住民をいわゆる文明人に改造する可能性を示唆したことにより、徐々に既存の構図を相対化し始めたと論じる。さらに佐藤春夫については、台湾旅行の体験から創作された「魔鳥」と「霧社」両

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

作品を分析対象とし、作中に現われた村人による「魔鳥使い」の排除というマイノリティに関わる問題や、日本人警察官との政略結婚ののち捨てられた「蕃婦」の問題などに注目し、作者が不十分ながらも示した原住民統治の破綻の諸相を読み取る。

第三章では、霧社事件後つねに事件の陰影を意識せざるを得なかった、台湾滞在経験を持つ4人の日本人作家、すなわち大鹿卓、中村地平、真杉静枝、坂口禰子を取り上げ、それぞれの原住民表象に考察を加える。大鹿卓については、霧社事件を現地調査した全国大衆党の報告書を参考にして創作された「タツタカ動物園」と「野蛮人」の両作品を分析の対象とし、「野蛮」の象徴として登場する「山猫」や「蕃婦」に、警備員や警察官である日本人が徐々に同化していく過程を追跡した上で、その変貌を通して示された、従来の「文明と野蛮」の構図を逆転させる作者の意図を認め、日本人作家による原住民表象の深化を見てとる。その一方、後続の作品「蕃婦」「奥地の人々」に関しては、前記の両作品に見られた達成が活かされておらず、男女関係をめぐるトラブルに矮小化されたと指摘する。多作であった中村地平については、原住民神話に関わる「太陽征伐」、原住民女性に関連する「蕃界の女」、を選出し、両作品にうかがえる原住民の世界観や生命力に憧憬する作者の姿勢を析出する。加えて、史実に深く関わる作品として「霧の蕃社」「長耳国漂流記」を取り上げ、霧社事件の折、警察官である主人公の温情がもたらした住民側の誤解、琉球漂流民殺害事件に伴う台湾出兵時に「生蕃」たちが文明国日本に示した羨望の念、といった言説を分析し、内包される「文明と野蛮」の二項対立的構造の相対化という作者の試みを指摘する。真杉静枝についても、数多くの作品から「台湾女性瞥見」「蕃女リオン」「リオン・サヨンの谿」「ことづけ」の4作品を選び、いわゆる「蕃婦」問題を中心にしつつ、とくに主人公の女性たちがいかに日本人男性へ忠誠を果たし犠牲を払ったかを追跡し、大きな悲劇性の存在を読み解く。そして作中の主人公たちの運命に大いなる同情を示す叙述を進めながらも、最終的にそれぞれを一種の「銃後小説」に仕上げたという作者の限界にも言及する。坂口禰子については、おもに霧社事件と深く関わる「蕃地」や「霧社」などの作品を取り上げ、「ルポルタージュ文学」として事件の真相解明を目指そうとする作者の意図を確認した上で、詳細なテキスト分析を通して、作品に内包された良心的な警察官と模範的な原住民との「親子関係」や、事件の伏線となった「親子の戦争」（慈愛なる父と反逆息子の対立）の経緯を提示する。そして、事件の「真相」をこのように矮小化させながらも、原住民を「野蛮人」から「普通の人間」に還元させた作者の営為を、類例を見ないものであると指摘する。

終章では、上記各章の内容を要約しそれぞれの関連性を再整理した上で、向後の研究課題を提示する。

如上の内容を持つ本論文には、以下の学術的価値が認められる。

まず、近代日本の台湾原住民認識について個々の作者を扱う先行論考が多数存在する中、本論文は、複数の作家、異なる執筆時期、を初めて考察の対象に据え、表象上、認識上の継承と断絶を提示し、不完全ながらもそれを構造的、通史的に捉え直した。とりわけ台湾領有初期の駐在者と、ほぼ同時期に台湾を訪れた「旅人」の作品を発掘し、従来ほとんど研究されてこなかった「空白期」を埋めたことは、大きな学術的な意義を有している。

また、台湾原住民認識を考察する場合、いずれの先行論考も台湾のみを取り上げ、台湾原住民をめぐる諸言説の分析に終始してきたが、本論文は、前史としてアイヌ、琉球に注

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

目し、表象、認識、また施策上の台湾との連続性を指摘し、はじめて近代日本における「土人」言説の系譜性を明らかにした。

さらに、本論文においては、8人の作者を羅列してその系譜を辿ることに終始するのではなく、別の作者の手による作品との比較も随所で行われているため、その作業から得られる数々の知見が、個々の作者の個性を一段と鮮明にし、原住民表象と認識における多様性と重層性を描出することに大きな貢献を果たしている。

もっとも、本論文には、いくつかの問題や課題も残されている。たとえば、一定の基準のもとに選別を加えたとはいえ、8人の作者を取り上げ、その作家たちの作品発表時期にみられる諸問題をすべて解決しようとしたため、テーマが分散し、各論の有機的な関連が意図したものより若干削がれた結果となっている。多くの先行研究を丹念に読み込み参考にして叙述を進めるが、先人の言説に配慮するあまり、自説を鮮明に主張できていない箇所もある。また、大量の基礎資料、とりわけ台湾原住民に関連する人類学や地理学、さらには行政文書などの文献を数多く引用しながらも、有効に活かしているとは言えず、論考のさらなる展開にやや不足の感を与えている。中国語話者ゆえの、日本語では不自然となる「漢語」の使用も散見される。今後克服すべきこのような課題を有するものの、本論文によって生み出された多くの新知見の意義は大きい。本論文は、近代日本文学と植民地文学の両面において、従来の研究に大きな進展をもたらしており、高い水準を有する学術成果に成り得ている。

以上により、審査委員会は全員一致で、本論文を、博士の学位を授与するにふさわしいものと判定した。